

# 2021年度

## 国語入試問題

(2021年2月3日実施)

座席番号									
------	--	--	--	--	--	--	--	--	--

### 【注意】

1. 解答はすべて「解答用紙」の所定の欄に記入してください。
2. 問題用紙および解答用紙は持ち帰ってはいけません。
3. 使用用具は、黒鉛筆またはシャープペンシル（H、F、HB、B）、消しゴム、鉛筆削り（電動式・大型のものは不可）とし、それ以外の使用は認めない。

解答用紙はマークセンス方式および記述式です。

1. 解答用紙は、汚したり折り曲げたりしないこと。
2. マークの記入に際しては、解答用紙に示されたマーク記入例に従って黒鉛筆またはシャープペンシル（H、F、HB、B）で正確に記入すること。
3. 記入間違いは、消しゴムで完全に消してから記入すること。
4. 座席番号記入欄には座席番号を、解答欄にはマークを記入する、あるいは記述すること。

## 問題Ⅰ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今までにもよく言われたことだが、砂漠では二つの道のどちらを選ぶかで水のある場所に行けるか否かがきまる。旅人は瞬時にして決めなければならない。一方が生への道であるなら、他方は死への道である。

それに対して、森林には生の可能性がいたるところに開かれている。二つのうちの一つの選択を思い煩う必要はない。

森のなかでは草木が繁茂し、いろいろな動物が棲息し、ほら穴があり、泉があり、たくさんものが神になり得る。アニミズムの世界である。多神教は普通のことだった。それに対し、砂漠では一本の大河、灼熱する太陽がいつさいに君臨し、ほかに目立つものはなにもない。唯一神への信仰が受け入れられるのは自然のことである。

人間は人間の力を超えたもののあることを知ったときに(1)超越者を意識する。呪術はまだまだ自分の力をたのみにしている。

占いは運命を他に託しているようにみえ、一見して宗教的信仰に似ているが、ある一定のことが必ず起こるとの自己信仰の上に成り立つ。結果が外れれば祈禱が足りないのである。そこではまだ宗教的信仰は生まれない。

人間のいかなる力も無力であることを知ったときに、はじめて人間は超越者を知る。農耕はそのきっかけをなした。

蒔いた種子が芽生えるのは土のなかにひそむ力のなせるわざで、人間には思い(a)オヨばない。芽が育つのは雨のなせるわざで、雨を司る力を人間は持っていない。雨のないとき、作物を枯死させるのは太陽のなせるわざで、いかなるものも太刀打ちできない。

砂漠ではことにそう痛感させられる。大地の神、雨の神が生まれ、そして太陽の神が主神となる。

(b)イフすべき神である。

(2) 日本神話のように、主神である太陽神(天照大御神)がやさしい女神であるというような例は、世界に他にひとつもない。

世界ではどこも多神教からはじまった。日本神話だけではない。ギリシア神話も多神教の世界である。多神教からは唯一信教への移行は自然の厳しい特殊な地域にのみ起こった。

エジプトでは太陽神が主神として確立されるときがきた。それに刺戟されてか、砂漠の縁辺部で遊牧の生活をしていたイスラエルの民が唯一信教に移行した。かれらの生活の基礎はヤギやヒツジに食べさせる草の生育いかにかかっている。草の生育は雨のいかにかかっている。雨は偶然にしか降らない。しかし、必ず嵐とともにやってくる。

イスラエルの神はしたがってまずは嵐の神であった。嵐の神の概念を通じて到達したイスラエルの神格は、ヤハウエ、あるいはエホバと呼ばれ、これがユダヤ教の神である。その後イスラエルの民族の限界を越えて普遍的な世界宗教に発展したときのキリスト教の神でもある。これらの神は嵐の神の性格を引き継いでいる。

砂漠では自然はいつも死の脅威をもって人に迫ってくる。草地や泉オアシスを手に入れるか否かは各部族のあいだの熾烈しれつな争いの原因ともなる。

他の部族に対する戦闘の精神と自らの部族の内部を結束させる団結の精神とが、彼らの生存の仕方の重要な基本要件となった。同一の祖先から出た血族共同社会に対する(c)ケンシンと犠牲がいつさいに優先した。砂漠においては、部族を離れては一滴の水を飲むことも、一片の肉を手に入れることもできない。

水も食糧も豊富な森林の世界とは何という相違であろう。ことに日本列島は雨が定期的に降るモンsoon地帯にある。

さりとて大河がないので洪水はたかが知れており、岩間から飲み水は滾々こんこんと湧き出で、山の幸、海の幸にめぐまれて栽培もほどほどにしておけばよい。イスラエルの自然条件とは何という大きな径庭であろう。

A に追いこまれることを知らなかった縄文人に、絶対的超越者への信仰が生まれる必然性がなかったのは、むべなるかなである。

イスラエルの民はこれとは反対に、強固な意志と激しい道徳心によって、個人主義に陥りやすい己れの罪を休みなく責めた。民族の団結をたえず危機にさらす原因はひたすら自分自身のうちにあることの内省にむしろまれる。

物資の乏しい砂漠の環境にあつて、人間的弱さに屈する誘惑は、森林の民よりもかえって強い。しかもそれを彼らは罪として強烈に自覚した。

罪の自覚に導いたのは「律法」であつた。律法を厳密に守ることは、おそらく弱い人間にはできない。

そこで、肉体を持たない純粹に人格的な神を立てる。そして神の前で、自分の人格全体がその根源において裁かれるという宗教的意識が芽生えてくる。と同時に、己れを汚れたものとするこの自覚が、神をただどこまでも聖なるものとする意識へと彼らをかり立てていく。

加えて、イスラエルの民には特有の選民意識があつた。人格神を中心に民族の団結を守っているだけでは、多分その意識は生まれなかつたらう。

ひとたび深い罪の意識を呼びさまされ、己れの汚れを体験し、神の前で律法を守れない人間としての根源的自覚をくぐり抜けたとき以後、もし神の要求が満たされた B には、なんらかの報酬が与えられるべきであり、それは他の民族を押さえて地上に覇とよを称よえることを措おいてほかのことではあり得なかつた。

この民族の神が全世界を支配して、地上に神の国を建て給たまうこと——この勝利の約束を彼らは「契約」と呼んだ。彼らの動かすことのできない固い確信であつた。

砂漠の民イスラエル人に特有の宗教心理的ドラマの第一幕をあえて要約してみた。日本人の心には、今のわれわれでなくても、縄文人であつても、——というより汚れを知らぬ彼らであればこそなお

——神の前での(3)絶望が希望に逆転するこのような形而上学的ダイナミズムを容易に理解することはできなかつたらう。

砂漠の民の宗教心理には、自己の生の一回性への強烈な思いがこめられている。天地万物には初めがあり、終わりがある。時間は神による天地創造のときから、最後の審判の日まで一直線に進んでいく。歴史に繰り返しはない。かくて地上での敗者は、天上で勝者にならなければ(4) 帳尻が合わない。イスラエルの民は、事実、第二幕以後で神に「契約」を守ってもらえなかった。地上での敗北を天上での神の国の実現で償おうとする弱者の内攻的復讐感情は、ただひとりの人、人間の姿をした救世主イエス・キリストの出現を待たなければ、解消しなかったのである。

砂漠では草も木もなく、倒れた動物の死体はただ白い骨を残すだけである。しかし森のなかでは草も木も生長し、いつか朽ちて土に返り、また新しい芽が出てくる。動物の死体の上に虫が群がり、腐肉の下から樹木が生い立ち、聳えるような巨木になる日もくる。その巨木もいつか倒れ、別の植物がその上に生い茂るときも来よう。

自然は永遠に循環する。時間は直線をなして進むのではなく、(d) エンカンをなして展開するのである。

インドの輪廻転生という観念もここから出てくる。一つの生物が他の生物に生まれ変わりそれがくりかえされる自然再生の循環は、日本では春夏秋冬の周期的時間観念と結びついて、ある意味では理解されやすい。

古来、日本人の世界では「生まれ変わり」という観念は一般的に広く受け入れられていた。「終末」とか、「最後の審判」という観念にくらべても、慣習的にずっとなじみやすかったのである。

インド人もまた超越者を意識した。しかしイスラエルの民と違って、人格神を樹てなかった。インド人は宇宙の根源に「非人格的な全一者」を措定する。そしてそれを「梵」と名づけた。

人間も、生物も、個別化されて、個体として存在していると思うのは(e) メイモウである。個体はことごとく全宇宙の根源の一原理に所有されているのである。

個別化された個体にあくまでしがみつくとのは錯覚である。この世の中で害を加える者と害をこうむる者とを別個の存在と思ひ、こっちは悪行、あつちは被害と考えたりするが、それは幻影である。

悪も害も同じ宇宙の意志の異なった二面にすぎない。いまだ道徳にとらわれているのは迷いのなかにある証拠だ。

万有の根本原理である「梵」は時間・空間・因果性の外にあり、数多性として個別化されることもないし、個体の生成、消滅とも関係がない。個体は変化し、生滅するが、宇宙の原理は不変である。

苦しみを加えるものと苦しみをこうむるものとの差違はしよせん現象にすぎない。宇宙の原理のうちこそいう差違はない。個体間の差異は、自然の根底に万物をつつみこみ、つねに自己同一的に偏在する「梵」とは関係がないことだ。

インド人は人里を離れ、森林の奥深く入って、ひとり瞑想しつづけた。

個体は全自然の生命の根源である「全一者」に所有されている。性欲の満足において、個体は自らを使い果たし、種族の継統というかたちで、全体的なものに統合されていく。無数の個体へと分散された人間は、生殖という絆によって、再び自然の生命意志のなかに統一を回復する。

インド神話の破壊の神シヴァが、男根の象徴リングで飾られるのは、死と生が一体であることとし

るしである。死は生を亡ぼすものではない。個体が死んでも種族は生き残るように、死はいわば生のうちに含まれている。

これは森林の奥に生きる生物の生命のシステムを日々目撃している者には、ごく自然な認識であったといえるだろう。

かくてインド人は、個別化された自我と、宇宙の根源に合って力に満ちている「非人格的な全一者」すなわち「梵」とがもともと一体であることを悟るところに、人間の救済をみている。それを名づけて、「梵我一如」と呼んだ。

(5) 日本列島に生きていた、森の住人。たちは、やがてインド人の叡智に魅了され、自分たちに欠けていた形而上学的思考への欲求をこれで充足させようとした。

(西尾幹二『歴史と科学 日本史を歩く』)

問1 傍線部(a)～(e)と同じ漢字を含む語を、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、

(a) 1、(b) 2、(c) 3、(d) 4、(e) 5。

(a) オヨばない

1

- ① カキユウ的速やかに実行する。  
② 失敗の責任をキユウダンする。  
③ コウキユウの平和を願う。  
④ ごみを掃除機でキユウインする。  
⑤ 犬はキユウカクが鋭い。

(b) イフ

2

- ① イ線と経線が交わる。  
② イシヨクジュウは生活の基本。  
③ 健康のイジに努める。  
④ 世界イサンを訪れる。  
⑤ イケイの念を抱く。

(c) ケンシン

3

- ① ショウケン会社に就職する。  
② 社会にコウケンする。  
③ ケンニン不拔の精神。  
④ 中止した方がケンメイだ。  
⑤ 問題点がケンザイ化する。

(d) エンカン

4

- ① エンドウに桜を植える。  
② 毎日エンシヨが続く。  
③ エンジュク味を増す。  
④ 味方にセイエンを送る。  
⑤ エンシユウ問題を解く。

(e) メイモウ

5

- ① モウマクに像を結ぶ。  
② モウドウ犬の育成。  
③ だますつもりはモウトウない。  
④ 車軸がマモウする。  
⑤ モウゲンに惑わされる。

問2 傍線部(1)「超越者を意識する」とあるが、その「意識」の仕方は「砂漠」と「森林」とではどのような違いがあるか。文中の記述を参照して「砂漠では、他方、森林では…」という形で、四十五字以内で説明しなさい。句読点を字数に含む。解答番号は、6。

問3 傍線部(2)「日本神話のように、主神である太陽神(天照大御神)がやさしい女神であるというような例は、世界に他にひとつもない」とあるが、日本においてのみ「やさしい女神」への信仰が生まれた理由の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、

7。

- ① 生への道と死への道の判断を瞬時にして決めなければならない砂漠とちがって、森林には生の可能性がいたるところに開かれており、一つの道の選択を思い煩う必要はないから。
- ② 人間のいかなる力も無力であることを知ったときにはじめて人間は超越者を知るが、種子の芽生えや芽の生育、作物の枯死を観察する農耕がそのきっかけをなしたから。
- ③ 自然はいつも死の脅威をもって人に迫ってくるものであり、これに耐えて生きるために人々を結束させるには、自分たちを守ってくれるやさしい女神が必要とされたから。
- ④ 自然に対して人間の力がおよばず、自然が死の脅威をもって迫る地域と異なり、日本列島は雨が定期的に降るモンスーン地帯にあり、水も食糧も豊富な自然条件が整っていたから。
- ⑤ 強固な意志と激しい道徳心によって個人主義に陥りやすい己れの罪を休みなく責め、民族の団結をたえず危機にさらす原因はひたすら自分自身のうちにあると考えられたから。

問4 空欄 A に入る語として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、

8。

- ① 独壇場
- ② 有頂天
- ③ 瀬戸際
- ④ 無尺歳
- ⑤ 居丈高

問5 空欄 B に入る語として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、

9。

- ① あかつき
- ② あかつち
- ③ あがない
- ④ あかはじ
- ⑤ あかるみ



問6 傍線部(3)「絶望が希望に逆転するこのような形而上学的ダイナミズム」とあるが、その説明として**適当でないもの**を、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、10。

- ① 物資の乏しい砂漠の環境では人間的弱さに屈する誘惑はかえって強く、己れを汚れたものとするこの自覚が、神をどこまでも聖なるものとする意識へと彼らをかり立てていくこと。
- ② 深い罪の意識と律法を守れない人間としての根源的自覚をくぐり抜け、神の要求を満たせば地上に覇を称えることが報酬として与えられるべきとの考えが生まれたこと。
- ③ 砂漠の民の神が全世界を支配して、地上に神の国を建て給うこと——この勝利の約束をイスラエル人が「契約」と呼び、彼らの動かすことのできない固い確信としたこと。
- ④ 砂漠の民の宗教心理には自己の生の一回性への強烈な思いがこめられており、歴史に繰り返してはならないため、地上での敗者は天上で勝者にならなければいけないかったということ。
- ⑤ 人間の姿をした救世主イエス・キリストの出現によって解消されることとなる、地上での敗北を天上での神の国の実現で償おうとする内攻的復讐感情が生まれたこと。

問7 傍線部(4)「帳尻が合わない」の意味として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、11。

- ① うだつが上がらない
- ② 前後の意味が合わない
- ③ 相性が合わない
- ④ 気持ちが悪くない
- ⑤ 話のつじつまが合わない



問8 傍線部(5)「日本列島に生きていた森の住人」たちは、やがてインド人の叡智に魅了され、自分たちに欠けていた形而上学的思考への欲求をこれで充足させようとした」とあるが、かつての日本人たちが「インド人の叡智」に親しみやすかった理由の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、

12。

- ① 砂漠では草も木もなく、倒れた動物の死体はただ白い骨を残すだけであるが、森のなかでは草も木も生長し、いつか朽ちて土に返り、また新しい芽が出てくるから。
- ② インドの輪廻転生という観念、すなわち自然再生の循環の考え方は、自然環境に由来する日本人の時間観念と親和性があるもので、受け入れられやすい観念だったから。
- ③ 人間も生物も個別化されて個体として存在しているのではなく、個体はことごとく全宇宙の根源の一原理に所有されているという考え方が共通していたから。
- ④ 万有の根本原理である「梵」は時間・空間・因果性の外にあり、数多性として個別化されることもないという考え方が日本人には理解しやすかったから。
- ⑤ インド人は、個別化された自我と、宇宙の根源に合って力に満ちている「非人格的な全一者」とがもともと一体であることを悟るところに、人間の救済をみていたから。

問9 本文の内容に合致するものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、

13。

- ① 森林には生の可能性がいたるところに開かれている。草木が繁茂し、いろいろな動物が棲息し、ほら穴があり、泉がある。そういったアニミズムの空間で、人間は人間の力を超えたものが神になり得ることを知ったときに超越者を意識する。
- ② 砂漠では同一の祖先から出た血族共同社会に対する自己犠牲がいつさいに優先される。イスラエルの民はそれを罪として強烈に自覚し、神の前で、自分の人格全体がその根源において裁かれるという宗教的意識を発生させた。
- ③ 砂漠の民の宗教心理には、循環する歴史への強烈な思いがこめられている。地上での敗北を天上での神の国の実現で償おうとする弱者の内攻的復讐感情は、イエス・キリストの出現を待たなければ、解消されなかった。
- ④ 森のなかでは、自然は永遠に循環する。インドの輪廻転生という観念もここから出てくる。この自然再生の循環は、日本の春夏秋冬の周期的時間観念と結びつき、古来の「終末」や「最後の審判」の観念に代わるものとして受け入れられた。
- ⑤ 個体が死んでも種族は生き残るように、死はいわば生のうちに含まれている。かくてインド人は、個別化された自我と、宇宙の根源に合って力に満ちている「非人格的な全一者」すなわち「梵」とがもともと一体であることを悟った。

## 問題Ⅱ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(1) 文学について考えたことはあるが、歴史について考えたことはなかった、というのが正直なところである。

二十代のころに、歴史小説を侮蔑していた。

現代に生きている者が、現代を直視しないで、現代に苦しまないで、現代の問題を(a)テイキシないで、過去に逃げ、安住したとすれば、作家がたねばならぬ勇気の点において雲泥の差があり、

A

と信じた。ただし歴史小説と時代小説とは区別していた。時代小説は

歴史的事実を利用はするが、それに寄りかからないので、創作の純度においてまだ救いがあるともっていた。その考え方からすると、文学とは、無いことを書くことであり、有ることを書く歴史の対極にある行為であった。有ったことを肯諾し、有ったという過去形を有るといふ現在形になおすだけのささいな冒険しか歴史小説にはない。そこにどんな激烈な造形があるというのか。作家が血を流して格闘するに足る対象があるはずはない。そう信じてつづけていた者に、歴史は創作から遠くであり、考察にあたらないものであった。

そういう認識は、自分の生き方と文学とにかかわりがあり、もつといえばことばをどう考えるかという文学の本質から発するもので、ことばの構築によって体现することのできる至上の美のかたちをめぐしている場合、歴史は雑音と雑色との混合体であるかぎり、文学より下位におかれねばならぬ形態である。それはそれでよかったという年齢があったことは否定しない。だが、ことばの純度を高める方法論をおすすめしてくうちに、人間が乖離乖離することに気づいた。べつないかたをすれば、小説のなかで行動しなくなった。かれらの行動は、ことばを毀こわす作用にほかならず、ことばの合理は人間の活動を停止させてしまう。そういう矛盾に到達すれば、人を描くことを基本とする小説は熄やまねばならない。

小説の原理を問いなおさねばならない時がきた。そのころ、三十歳の手前であり、自分がおもに読んだ本は、モーリス・ブランショ、ミシェル・フーコー、ロラン・バルトなどの著作であった。それと同時に文体の模索にはいった。五、六年はその模索がつづいたであろう。だが、それよりも生活するということが日々の課題であった。今日がおわれば明日がくる、というような安楽さからかけはなれたところにおいて、明日についての不安に盈みちているのが今日であった。小説の原理どころではない、生活の原理を問いたい。そういう B からのがれられないうちに、ひとつわかったことがあった。

「悟性」

ということである。自分は感性と理性とで創作活動をおこなってきたが、経験にうらうちされた理性を悟性とよぶのであれば、それが欠如していた。すべてが虚無に墜おちてゆくような文学形式しか創りえなかつたのは、悟性の不足のせいではないか。たとえば小林秀雄（注）氏は悟性について書き、自分はそれを読んだ。しかし理解するのに十数年もかかった。自分の愚鈍（注）さにあきれはてるしかない。

自分の存在がそれほどあやうく、無いにひとしいのに、他者はどうなのであろう。ここで少々わかりにくいことをいうが、それ以前の他者はいかなる者でも自分の内なる他者であった。自分の感性と

理性とで包含しうる他者であった。ところがそれ以後の他者は自分の外なる他者で、自分の安危にかわりなく存在する者であり、理性ではなく悟性をそなえてはじめて理解の糸口をみつける存在であり、そうでなければ感情によって多少の出入りはあるがまったく無関係な存在である。そういう他者がこの世に、この世界に、盈ちていて、おおかたは社会構造などによって無自覚に助けあって生きている。その認識の有無は、どうやら歴史との接触から発しているといわねばならない。

歴史は悟性の (b) ショサンである。

歴史的事実は非凡でも何でもない。織田信長が本能寺で死んだことは、隣人が焼死したこと、どれほどのちがいがあるか。そんなことを考えはじめたのが、歴史との接触であるといえたいえる。その考えの延長上に、歴史とは定形をもたずに、いつでも無に帰る用意のあるものであるがゆえに、歴史が歴史であるためには、つねに創造が必要であるという自覚が生じた。この自覚は (2) 恣意性に富んだ想像力を規制する。はいはいはなしが、不自由を知らない者には歴史はみえないということである。

(3) 他者がみえることと歴史がみえることとは、たぶんおなじことであり、それによってはじめて自己がみえる。おそらく文学の基本認識もそこにあり、その相関において文体を発展すべきであることを自分は三十七歳まで気づかなかった。

自分の合理を捨てないと、新しい物を発見することができない。このことは過去にも現在にもあてはまり、歴史や文学の世界の外でもあてはまる。人は自身を例にとってみればよい。自身は他人に説明しやすい存在であるかどうか。人は不合理であり、矛盾そのものである。その自身が、十年前の自身とくらべてみて、新しくなったのか古くなったのか。

問うて答えをえられないところから文学は発している。

じつは、自分にとって、歴史を小説化するという作業もおなじ起点をもつ。ただし、ことわっておきたいのは、小説化することと物語化することとは、ちがう。人の存在にたいする問いかけがなされて、小説といえる。そうでなければ物語である。この小説というジャンルをもってはじめて司馬遷の (c) ヒルイない偉大さがわかったといえる。『史記』より班固の『漢書』のほうが評価が高かった時代もあるのである。両書をくらべてみると、内含されているエネルギーの量があきらかにちがう。『史記』のほうがはるかに大きい。『史記』が二千年以上の歴史をふくみ、『漢書』は二百年ほどの歴史しかあつかっていない、ということではない。個人を彫琢する度がちがう。人への問いかけの深さがちがう。さらにいえば、おのれの問いかけがこだまとなってかえってくるまで、司馬遷は待っている。そういう時の厚みを『史記』はそなえている。

日本の歴史にとって『史記』は、他者である。が、日本をほんとうに知りたければ、外国の史書を讀まなければなるまい。中国に黄帝があらわれて二千年以上たつて司馬遷があらわれた。その (d) シャクドを日本にあてはめてみれば、卑弥呼があらわれて二千年後は二十三世紀になる。そのころ日本に大歴史家があらわれるのであろう。歴史が相似形を好むのであれば、そうである。

歴史は行動の美学を教えてくれる。

(4) 文学に籠もっていたころには、みえなかったものである。人は行動し、停止する。大いなる停止は死である。が、死が死でおわらないところが歴史というものである。むしろ死が発点になると

いう逆説をつねにたもっている。孔子の死を想<sup>おも</sup>つてみればよい。かれの死は弟子たちを生かし、それによって孔子はくりかえし生まれ、成長しつづけた。それでわかるように歴史は逆説を<sup>(e)</sup>「ジヨウビ」し、しかも複成的である。そういう風景を現代においてみることはむずかしく、現在形でありつづけようとすると、遠近法がうしなわれる。

人は豊かでありたい。その願いは、何においても共通であろう。そういう自分があるということは、そういう他者がいるということである。すべてはそこから発せられるようにおもわれる。

(宮城谷昌光『他者が他者であること』)

(注1) モーリス・ブランショ、ミシェル・フーコー、ロラン・バルト……二〇世紀の思想に大きな影響を与えたフランスの思想家たち。

(注2) 小林秀雄……一九〇二～一九八三。文芸評論家。

(注3) 司馬遷……中国前漢時代の歴史家。

(注4) 班固……中国後漢初期の歴史家。

問1 傍線部(a)～(e)と同じ漢字を含む語を、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、

(a) 14、(b) 15、(c) 16、(d) 17、(e) 18。

(a) テイキ

14

- ① 誤字をテイセイする。
- ② 敵陣をテイサツする。
- ③ 具体的にティアンする。
- ④ 粗品をシンテイする。
- ⑤ 土地をテイトウに入れる。

(b) ショサン

15

- ① 船をサンバシにつける。
- ② 企業のトウサンが相次ぐ。
- ③ 大企業のサンカに入る。
- ④ サンジョウに目を覆う。
- ⑤ 多くの企業がキョウサンする。

(c) ヒルイ

16

- ① ヒハンの言動。
- ② ヒフがかぶれる。
- ③ 色の変化をタイヒする。
- ④ 植物にヒリヨウをやる。
- ⑤ ショウヒ税が上がる。

(d) シャクド

17

- ① 地図のシユクシヤク。
- ② シャクドウ色の肌。
- ③ シャクメイを求める。
- ④ 情状シヤクリヨウの余地。
- ⑤ シャクヤ住まい。

(e) ジョウビ

18

- ① ジョウニン理事国。
- ② ジョウチヨウな表現。
- ③ そうなることはヒツジョウだ。
- ④ 胃をセンジョウする。
- ⑤ ジョウゾウ酒をつくる。

問2 傍線部(1)「文学について考えたことはあるが、歴史について考えたことはなかった」とあるが、筆者はなぜその後歴史について考えるようになったのか。その理由として**適当でないもの**を、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、19。

- ① ことばの構築によって体现することのできる至上の美のかたちをめざし、ことばの純度を高める方法論をおしすすめてゆくうちに、人間が描けなくなったことに気づいたから。
- ② 登場人物の行動はことばの純度に反する作用にほかならず、ことばの合理は人間の活動を停止させてしまうという矛盾に到達し、小説の原理を問いなおさねばならなくなったから。
- ③ 自分は感性と理性とで創作活動をおこなってきたが、経験にうらうちされた理性を悟性とよぶのであれば、それが欠如していることに気づいたから。
- ④ 自分の内なる他者は自分の感性と理性とで包含しうるが、自分の外なる他者は自分の安危にかかわりなく存在する者であることに絶望したから。
- ⑤ 悟性をそなえてはじめて理解の糸口をみつける他者や、まったく無関係な存在である他者が世界に生きているという認識の有無は、歴史との接触から発していると気づいたから。

問3 空欄 A に入る内容として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、20。

- ① 歴史小説の秀作よりも現代小説の凡作のほうが価値が高い
- ② 歴史小説の凡作よりも現代小説の秀作のほうが価値が高い
- ③ 歴史小説の秀作よりも現代小説の凡作のほうが価値が低い
- ④ 歴史小説の凡作よりも現代小説の秀作のほうが価値が低い
- ⑤ 歴史小説の秀作と現代小説の秀作とは優劣がつけられない

問4 空欄 B に入る語として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、21。

- ① 性状
- ② 窮状
- ③ 病状
- ④ 名状
- ⑤ 症状

問5 傍線部(2)「忤意性」の意味として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、22。

- ① 悪意のある考え
- ② 善意の考え
- ③ 気ままな考え
- ④ 深い考え
- ⑤ 浅い考え



問6 傍線部(3)「他者がみえることと歴史がみえることとは、たぶんおなじこと」とあるが、どのような意味で「おなじこと」であるというのか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、23。

- ① 人間も歴史も定形をもたず、いつでも無に帰す可能性があるため、つねに恣意的な想像力を排除した創造を必要とするということ。
- ② 人間も歴史も問うて答えをえられないところがあり、相手の存在にたいする問いかけによって説明が可能になるということ。
- ③ 人間も歴史も不合理なものなので、自分の合理を捨て、新しい物を発見するつもりで向き合わなければならぬということ。
- ④ 人間も歴史も、不合理であり矛盾そのものであるので、歴史を物語化するのは文学の世界の外ではできないということ。
- ⑤ 人間も歴史も自分の内側に存在し、経験にうらうちされた理性をそなえてはじめて理解の糸口をみつげうる存在であるということ。

問7 傍線部(4)「文学に籠もっていたころには、みえなかったもの」の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、24。

- ① 日本の歴史にとって『史記』は他者であるが、日本をほんとうに知りたければ、日本の史書だけでなく外国の史書を読む必要があるということ。
- ② 中国でも日本でも偉大な指導者から二千年以上たって大歴史家があらわれたことから、歴史には相似形を好むという法則があるということ。
- ③ 人の現実的な行動の魅力と、人生の締めくくりであり大いなる停止でもある死が、歴史にとっては逆説的に出発点であるということ。
- ④ 孔子が自らの死によって弟子たちを生かし、それによって再生しつづけたように、歴史は逆説的で、重ねて作られていくものだということ。
- ⑤ 逆説的で複成的である歴史の風景を現代においてみることはむずかしいが、現在形でありつづけようとするのが文学の美であるということ。



問8 歴史の意義を理解するようになった筆者は、社会をどのようにして営まれているものと認識するようになったか。文中の記述を参照しながら四十五字以内で説明しなさい。句読点を字数に含む。解答番号は、25。

問9 本文の内容に合致するものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、26。

- ① 二十代の筆者は歴史小説と時代小説を区別し、時代小説は歴史的事実を利用はするが、創作の部分が多すぎると低く評価していた。
- ② 三十代になった筆者は、自分には感性と理性はあるが、経験にうらうちされた理性である悟性が不足していることに気づいた。
- ③ 歴史が歴史であるためには、つねに創造が必要であるので、恣意性に富んだ想像力を解放し、語り直していく必要がある。
- ④ 問うて答えをえられないところから文学は始まる。ただし、人の存在にたいする問いかけがあれば物語、なければ小説である。
- ⑤ 死が出发点になるという逆説を歴史は示しているが、そういう風景は現代の遠近法においてはじめてみえてくるものである。

国語 (20210203) 解答一覧

大問	小問	解答番号	正解
問題 I	問 1	1	①
		2	⑤
		3	②
		4	③
		5	⑤
	問 2	6	記述問題
	問 3	7	④
	問 4	8	③
	問 5	9	①
	問 6	10	③
	問 7	11	⑤
	問 8	12	②
	問 9	13	⑤
問題 II	問 1	14	③
		15	②
		16	③
		17	①
		18	①
	問 2	19	④
	問 3	20	①
	問 4	21	②
	問 5	22	③
	問 6	23	③
	問 7	24	④
	問 8	25	記述問題
	問 9	26	②